

## マラキ書

マラキはイスラエル人がバビロン捕囚から  
帰還して百年後くらいの預言者で  
エルサレムに住んでだいぶ時間が経った民に対して  
彼はメッセージを向けました 神殿もしばらく前に再建されて  
いましたがエズラ記やネヘミヤ記にあるように  
イスラエルの状況はあまり良いとは言えませんでした  
捕囚から帰ってきたばかりの頃は民の期待は大きく  
神殿も彼らの生活も再建し預言者たちが語った  
約束の成就を見ることができると思っていました  
そしてメシアが来てすべての国々の上に神の王国を建て  
義と平和がもたらされるだろうと思っていたのです  
しかしそうはなりません エルサレムに戻ってきた民は彼ら  
の先祖と同じように神への不誠実さを露呈し  
その結果貧困と不正がはびこっていたのですマラキ書では  
この新しい世代がいかにか墮落していたかが明らかになります  
この書は口論が連続する構成になっています ほとんどのセクションで神がまず  
民に対して何かの主張や非難をして民はそれを否定して  
神の言ったことに疑問を呈します そしてそれに対してさらに神が  
応答をする ということが6回繰り返されます  
前半の3つの口論では神がイスラエルの墮落をあげき  
後半の3つの口論では彼らの墮落に対峙しています  
これらのやり取りを読むと民は捕囚を経験しても根本のところでは  
何も変わらず心が頑ななままのようです  
最初の口論では神がイスラエルの落ち度にもかかわらず  
契約の民である彼らを愛していると言ったことに対し  
民は不遜にもどんなふうに愛してくれましたかと答えます  
神は兄のエサウではなく彼らの先祖であるヤコブの家を選び契約  
を担うものとしエサウの子孫は創世記やオバデヤ書にあるように  
滅ぼされたことを思い出させました このように最初の口論からイスラエル  
は神の愛と誠実さに対する疑いと不信感をむき出しにしている  
のです 2番めの口論は第二神殿の問題を  
あげています 神が民は神殿を軽んじ汚している  
と責めると民はどんなふうに軽んじました  
かと口答えします 恥知らずにも足が悪かったり

傷があつたりする動物や病気の動物を  
ささげ物として持ってくる民のことを神は取り上げ  
それは彼らが神を大事にせず敬ってもいないからだと言います  
しかも民ばかりでなく神殿を司る祭司たちもそうなのです  
彼らは腐敗した礼拝を見逃してただけでなく  
その一部を担っていたのですイスラエルは民も祭司も  
不誠実だったことが明らかになりました 3 番めの口論で神はイスラエルの男  
たちが神と自分たちの妻を裏切ったと  
非難しますが彼らはそれを否定します  
神は偶像礼拝と離婚という最悪の組み合わせの中で  
男たちは異邦人と結婚しネヘミヤ記 13 章にあるように  
妻たちが代々拜んでいる偶像を家庭に持ち込んでいることをあば  
いています マラキはこの事実を男たちがちゃんと  
した理由もなく妻と離婚する風潮と結びつけます  
イスラエル人たちはそれを問題にもしていないようでしたが  
マラキはそれは大きな問題であり神との契約に反することだと咎  
めます ここからイスラエルの反逆に対  
峙する後半の口論に入っていきます  
4 番目の口論はイスラエルの民が神の正義はどこにある  
のですかと言って神の不在をなじるところから始まり  
ます 不正と墮落がはびこる中神は何  
もしていないと感じたからです 神は主の日に神ご自身が戻って  
こられる時のために民を準備をさせる使者を遣わすと  
答えます 神は精錬する火のように来て  
偶像礼拝と性的不道徳と不正を取り除き  
誠実な者だけが残された神の民となるのです  
5 番めの口論では神は民に立ち返るように呼びかけますが  
民はどのようにして帰れるだろうと答えます  
神は彼らが什一献金をささげていない事実を突きつけて  
彼らの自己中心性に立ち向かいました  
什一献金とは民が神殿と祭司を支えるために年に一度  
収入や作物の十分の一をささげることです  
この規定についてはトラーのいろいろな箇所にあります  
マラキ書にもネヘミヤ記にも書いてあるように  
民はこの責任をないがしろにしていたため  
神殿が荒れ果てていました そこで神は彼らを大いに祝福したい

のだがそのためには彼らが誠実でなければならない  
と戒めているのです 最後の口論で民は神を非難し  
神に仕えるのは無駄だと言います 彼らは悪人や高慢な人々が成功  
しているのに神が何もしないと思えるのです  
神はこの書の中で初めて会話形式ではなく  
短い物語をもって答えイスラエルの残された民について  
語りました 彼らは主を恐れ集まって  
神を敬い仕える方法について語り合いました  
神は彼らのために記憶の書を記すように命じ  
彼らがそれを読んで神のご性質と約束を思い起こす  
ことができるようにしました マラキはここで聖書という贈り物  
を通して神がしてくださったことを思い  
出しそれによって神への忠誠心と  
未来への希望がかきたてられることについて考察しています  
こうして本書は結論のセクションに至り  
4 番目の口論に出てきた主の日についてのイメージが取り  
上げられさらに発展しています  
神は民の中から悪人を取り除くために  
裁いてきよめる主の日を定めたと言います  
しかし残された民にとっては主の日は恐怖ではなく喜びをわき  
あがらせるものになります それは癒やしと命と未来への希望  
をもたらす朝日のようなものなのです  
6 つの口論はこれで終わりますがマラキ書はこれで終わりではな  
く締めくくりのような最後の 3 節があります  
これはマラキ書のみならずトーラーと預言書全部を締めくくる  
ような 3 節です まずモーセの律法つまりトーラー  
を覚えよ と呼びかけていますが  
これは聖書の最初の 5 書のストーリーと  
契約の律法を指しています 次に預言書全体の要約として  
私は主の日の前に預言者エリヤを遣わし  
神の民の心を再び神に向けさせると言っています  
つまりこのエンディングはトーラーと預言書を要約し  
それらは未来を指し示す一つの物語であるとまとめています  
イスラエルは神に贖われたのに神に反逆し  
心を頑なにしトーラーの掟を破ることで神を裏切りました  
しかし神がモーセのような預言者新しいエリヤを遣わす時

申命記やエレミヤ書やエゼキエル書にあるとおりに民の頑なな心は癒やされ神に立ち返るだろうと言っているのです。この最後の締めくくりは聖書を神からの贈り物として示しこれを読みよく考え祈るように促しています。聖書は人間の現実である自己中心性や罪を明るみに出し同時に神がやがて使者を遣わして次に神ご自身が来て悪に立ち向かいご自身の民を回復し癒しと正義をもたらすという神の約束も伝えています。これこそがマラキ書とトーラーとすべての預言書が語っている未来の希望なのです。

#### 500 字要約

マラキ書はバビロン捕囚からの帰還後、エルサレムに住むイスラエル人に向けられた預言書です。神殿再建後もイスラエルは不誠実で、墮落が進んでいました。マラキ書は口論の形式で、神が民の墮落を指摘し、彼らが反論する構成となっています。神は契約を破る不誠実さや神殿での不正に対抗し、真の崇拜と忠誠を求める。最後に、神は新たなエリヤを遣わして心を回復し、主の日に向けて準備を促し、聖書全体を要約し未来の希望を語ります。マラキ書は聖書が現実と神の約束を示し、未来の希望を伝える贈り物であることを強調します。